

# 半世紀前からの贈り物

「今、蘇る『文集』」

## 贈り物



蒲郡市民間大使  
内田雅敏・プロフィール  
蒲郡町生まれ  
東京弁護士会所属  
著書「乗っ取り弁護士」  
「これが犯罪? ビラ配りで  
逮捕を考える」など多数

前号までのあらすじ

思いもかけず内田氏に届いた小学2年のときの文集。

文集を開くと、同級生たちの懐かしい文章が目飛び込んできました。いろいろなテーマごとに書かれている文集を読み進むうち、自分の書いた文集に行き当たりました。そして、次には…



13号台風通過直後の松原町(昭和28年)

よく一緒に遊んだ幼な友達の文もある。

さかな

ぼくは、さかなをつかみにいった。さかなをつかんでかんかんの中にいれたのでしんだ。ぼくはおはかをつくってやりました。

(H・Y男児)

さんま

みちをとおったら、どこからかさんまのおいがしてきた。ぼくはくいたくなつた。(Y・I男児)

小学校低学年のころは、まだ背伸びをするようなことをせず、見たまま、感じたままをそのまま素直に書いていたので読んでいて気持ちが良い。「さんま」などは一片の詩だと思う。

大水

風がすごくふき出しました。松の木がたおれてしまいました。夜が近づくとだんだん水が入ってきました。山に逃げました。こわい夜がすぎて、あくる日水の中には、金魚がいくらでも泳いでいま

す。みんなはむちゅうで金魚をすくっていました。

(K・S男児)

この年の秋に襲った台風13号の被害に関するものだ。Kちゃんの家は海岸端で高潮が来たので、すぐ隣にあった丘に退散したのであろう。近くに金魚屋の養魚池があり、そこがあふれて金魚が逃げ出したのだ。子どもたちがすくった金魚はあとで金魚屋に戻したが、金魚屋から随分感謝されたと朝礼の際に校長先生が話したことを覚えている。

台風被害に対し、全国から古着などが送られ、被害に遭った海岸端の子どもたちが、救援物資という言葉を初めて知ったのは、このときだ。台風被害に関してはこんなものもある。

冬休み

もうすぐ冬休み、みんなうれしい、わたしもとてもうれしくてたまらない。毎年、冬休みにはとっておくに汽車でつれていってもらえるから、でも、ことは水害だったからきつとどこにもいけないと思う。

(E・M女児)

彼女は町でも裕福な製粉会社

家族旅行というのを毎年していたのであろう。さすがだと思ふ。家族に関してはこんなものもある。

おかあさん

おかあさんとおとうさんとけんかして、かあちゃんはこうたにいきました。

(M・H男児)

「こうた」というのは隣接で、たぶん「かあちゃん」の実家ではないかと思われるが、子どもに感じたままを書かせるといつてもプライバシーの点でどうかかと心配もしてしまふ。

子どもの文章力は家庭環境、兄弟、とりわけ姉たちがいるかどうかによっても大きく左右されるようだ。

おつかい

わたくしは、お肉を買いにいくなときは、いつでもわたしがいきます。わたしには妹がいないので、おねいちゃんと言ってくれる人はひとりありません。肉屋にいくと、いつでも、おばさんが「ねえちゃん、なにがいい」というので肉屋のおばさんは大すきです。だから、わたしが買いにいくなので

(H・T女児)

(つづく)